この末の世に、日本人として出来ること

西九州伝道所
佐々木正明

和の国日本と聖徳太子

日本の歴史の中で、日本に最も大きな影響を与えた人物は、もしかすると、聖徳太子かもしれない。いろいろな意見があり、判断基準も異なるとはいえ、また日本人の多くも、彼について詳しくは知らないのだが、少しだけ学びを深めてみると、その影響力の大きさは群を抜いているがわかる。彼が記した「和をもって貴しと為す」という考え方は、多くの日本人の哲学となり、生きる規範となった。

日本は和の国であり、大和の国である。ただし、日本を大和と呼ぶこと及びその年代については諸説があり、聖徳太子のあずかり知らないことであったらしい。彼の時代、日本は三国志の中で邪馬台国が倭人と呼ばれ、それが大倭と呼ばれるようになったのかも知れない。大和の国と呼ばれるようになったのは、まだ漢字が用いられていないころのことであり、倭の国が同じ発音の和の国となったのかもしれない。邪馬台国が和の国と称されていたとも考えられる。ちなみに日本史で大和時代を調べてみると、随分早く、3世紀から8世紀に至るらしい。定義を少し狭くすると、大和の国とは、今の奈良県のことだったらしく、「やまとのくにはまほろばのくに」と言われ、まことに素晴らしく住みやすいところというという意味らしい。

このようなことを考えると、和をもって貴しと為すというのは、聖徳太子が語り始め、教え始めたことではなく、当時一般に言われていたことに、「そのとおりだ」と感銘を受け、17条の憲法の第一条に取り入れ、それを広め、人心に深く留め、人の生活の基本としようと考えたのかも知れない。とにかく和をもって貴しと為すという哲学、生き方は現代まで、日本人の生き方、あり方として、綿々として継承されて来た。それは争いの止まなかった時代でも、消えることはなかった。例えば戦国時代の武将の多くも、自分が一番強くなって天下を獲るのだという野望よりも、日本という国を争いの無い平和な国にするために、自分は勝たなければならないと考えたらしい。だから敵として戦った相手をも、同じ考えに命を賭けて立った同士として、手厚く葬ることもできたらしい。

大平洋戦争と和

そのような日本人の中に見られる和を重んじる心は、第二次世界大戦と呼ばれるようになった、太平洋

戦争の後、戦後処理軍として入って来た、マッカーサーを司令官とする駐留軍の政策によって、一時は殆ど消し去られてしまった。駐留軍は実質的にアメリカの軍隊であり、アメリカ政府の意向の下にあった。アメリカは古くから親中国を旨として、日本を見下してきた。せいぜい中国へ渡るときの艇泊地としか見做して来なかった、その日本が中国に侵略したのである。それは赦しがたいことであった。できれば、日本を叩き潰したかった。しかし時の大統領ルーズベルトは、すでにヨーロッパで始まっていた第二次大戦には、絶対参加しないという選挙公約によって、大統領にえらばれていたために、たとえチャーチルやスターリンからの矢のような催促があったとしても、それに応じることが出来なかった。それで一計を案じた。もともと、西欧植民地国からアジア諸国を開放するなどと謳って大東亜戦争と名付け、って中国と争いを始めた日本と戦うのは、アメリカにとっても有益だ。アメリカも中国での利権を大きくすることが出来る。そういうことになれば、しかもアメリカ国民が、日本を徹底的に卑怯な国、悪の国と思い込むような方法で日本と戦争を始められれば、これに越したことはない。日本がいう大東亜戦争を、太平洋戦争にし、第二次世界大戦にすれば、日本は三国同盟で日独伊とつながっているために、アメリカは大義をもってヨーロッパ戦線にも参加できる。それでアメリカは、以前から進めてきた日本封じ込め作戦をさらに強力にし、あらゆる手を尽くして天然資源の乏しい日本を封じ込めつてにでた。何が何でも日本は、アメリカに戦いを挑まなければならないように追い込んだのである。そのためには同盟国であるイギリスの海軍の協力もえて、強力な二隻のイギリスの軍艦、レプルスとプリンス・オブ・ウエールズで、マレイシア一体の日本商船の航行を封鎖した。

日本はこのアメリカの作戦に陥って、真珠湾の奇襲攻撃を行った。これは奇襲とよばれているが、アメリカが日本を引き込んだのっであり、事実、日本の暗号文電はすべてアメリカに読まれていて、真珠湾作戦も大統領に筒抜けであった。ただしこれはアメリカ国民だけでなく、政府や軍の高官までも、例えば真珠湾軍司令官さえ知らされていなかったのである。そのためにメリカ国民は、日本が宣戦布告をしないまま奇襲攻撃をしたと信じて、これを憎み、復讐を誓い、勇んで太平洋戦争に突入すべきだという世論が作り上げられた。こうしてルーズベルトは、ヨーロッパ戦線に加わる立派な口実を得たのである。太平洋戦争など、ルーズベルトにとっては、弱小国日本との戦いであり、瞬く間に踏みつぶしてしまうことが出来ると読んでいたのである。

当時の世界はまだまだ植民地主義の意識が強かった。植民地政策に対する反対が徐々に強まり、その撤廃に関する議論がされた最初の国際会議は、パリ講和会議であったが、ここでは植民地政策への反対意見がまとまらなかった。しかし、植民地政策反対の機運は強まり続けた。当然、反対は植民地政策で国益を上げてきた国々から起こった。今この論を勧めているのは、主にアメリカを中心にしてなので、アメリカにおける植民地主義について少しだけ述べておこう。先ずアメリカはイギリスの植民地であったことから始めなければならない。とは言えこれは自分たちが出てきた国、イギリスからの独立であり、様相は異なる。独立したアメリカは、それまでの原住民、アメリカインデアンの抑圧を強め、およそ600万人いたと推定される彼らのほとんどを滅ぼしてしまった。最初に移植して来た人々を助けるために、トウモロコシなどの栽培法を教え、飢饉から救ったアメリカインデアンの多くは、その善意を裏切られて、滅ぼされたのである。その後

もアメリカはアラスカをロシアから買い取り、ルイジアナをフランスから買い取っている。これは正当な売買であるからまだ良いのだが、その後アメリカアは、1845年にで汚い手を使った戦争でメキシコに勝利し、カリフォルニア、ねばだ、ユタ、アリゾナ、ニューメキシコ、ワイオミング、コロラド、テキサスを奪い取った。さらに無敵艦隊を失い国力を落としたスペインからは、キューバをを始めとした西インド諸島、グアム、フィリピン、プエルトリコの一部を植民地とした。時代は少し遡るが、アメリカは、メキシコに対して行った不法な手段でハワイ陥れ、パナマまでも手中に収めた。日本が長い間国是としてきた和の精神など、どこにも存在しなかった。特にアメリカは人種差別が激しく、有色人種は人間とさえ認められなかったことが多い。日本は立派な有色人種である。色は黄色いが白人と同等に認められているなどと喜んで、人種差別には目もむけない日本人たちもいることには、あきれてものも言えない。

日本などは、最初太平洋戦争とも、第二次世界大戦とも呼ばず、大東亜戦戦争と呼び、日本の戦争の目的は、アジア諸国を植民地主義国から解放することであった。すくなくても、その主な目的の一つであった。そしてその日本は驚くほど強かった。というより手ごわかった。それで戦争は長引いた。ルーズベルトは太平洋戦争開戦以前から、チャーチルやスターリンとも意を通じて、ソ連の参戦も原爆の投下も初めから作戦の中に加え、千島列島や日本の北部のソ連の侵略を認めていた。だから、北方四島のソ連の統治は改選前から計画に入っていた。ルーズベルトはかなり以前から共産主義に傾いていたのである。それで当のアメリカは、奄美列島と沖縄列島を手中におさめ、主にソ連に対抗して軍備を整えた。アメリカ大統領は、戦争を始めた共産主義になびいたソ連びいきの人物ではなく、トルーマンに変わっていた。アメリカもソ連も、8月15日が終戦とは理解していない。8月15日を終戦としているのは、日本だけである。大概の国は、日本が降伏文書に調印した9月2日（日付変更線によっては9月3日）と考えている。だから終戦後になって、ソ連が攻めてきたと考えるのは日本の間違いである。日本は降伏していたが、終戦にはなっていないというのが、大概の国の理解である。

日本がどんなに粘り強く戦っても、しょせん、アメリカの強大さには太刀打ちできなかった。ただ、長い間持ち続けただけである。日本はかなり早くから、アメリカとの和平を望み、様々な手を尽くしていたが、これをことごとく退けたのはアメリカである。そして、日本との戦争終結を早めるためと偽って、都市の無差別空爆を行い、何十万もの女性や子供を含めた民間人の命を奪い、原爆を落としさらに数十万の命を奪った。アメリカは20程の都市に原爆を落とすことを考えていたのだが、それは自分の命をも駆け、無条件降伏さえ飲んだ天皇の、8月15日の玉音放送によって、実現を妨げられた。ルーズベルトの急死が大きく影響したであろうことは言うに及ばない。日本が北方領土だけを失い、北海道本当は無傷で残ったのは、以前満州で活躍し、数万人のユダヤ人救ったことで知られる樋口中将が、このようなこともあろうかと、北海道の守備を固めたためである。スターリンは、戦争末期のヤルタ会談で、体調が悪く何も言うことが出来ないほど弱っていたルーズベルトを出し抜き、会談を有利に導いていたのである。

マッカーサーと War Guilt Information Program

こうして戦争は終わったが、日本の廃頽は誠に惨めなものであった。そこにやってきたのがマッカーサーを司令官とした駐留軍である。それまで鬼畜米英と呼んで憎んでいた敵国ではあったが、事実上アメリカの軍隊であった駐留軍の日本支援の働きは、たちまち日本人の驚嘆を呼んだ。食料、衣料、医薬品などの物資の支援、さらに奨学金による留学の制度、そして農地改革、財閥解体と、アメリカ人の民主主義、ヒューマニズムは日本人のアメリカへの尊敬、畏敬にとって変わった。私が生まれたのは敗戦の1年前である。私はこのアメリカ万歳の中に育てられた。小学校の運動会は源平の旗色の紅白から来たのではなく、赤アメリカ、白進駐軍の紅白だと教えられたほどだった。しかし、これも今考えると、アメリカの巧妙な日本支配の計略だったと考えるべきかもしれない。

たしかにマッカーサーは、天皇の高度な人格に打たれ、多くの日本人知識人の言うことにも耳を傾け、天皇を戦争犯罪者として罰することを止めたばかりか、天皇制そのものを継続させた。日本が日本として存続してきたのは、天皇家があったからだと、彼は理解することが出来たのである。しかしその一方で、彼は戦争犯罪情報作戦(War Guilt Information Program)を徹底的に行った。太平洋戦争の悲劇はすべて、戦争好きな日本人為政者たちが行った犯罪によるものであり、一般日本人も彼らに騙されたとはいえ、彼らと共に、この素晴らしい国アメリカと戦った罪を負わねばならぬと、日本人の精神に刷り込む作戦である。つまりこれは、自分自身も戦争を後押しした犯罪者であると、日本人に信じ込ませる心理作戦である。この作戦の下には国際法も、人権も、日本側からの証拠も、何もかまも無視した東京裁判も行われた。植民地であったインドから参加していたパール判事は、このような不当な裁判に私は関わりたくないと、その役を辞任した。こうして罪もない多くの日本人が、出鱈目な理由によって処刑されたのである。特に A 級戦犯は、犯第二次世界大戦後、連合国が「平和に対する罪」を問うために訴追したもので、それ自体が国際法に反している。しかしこれは初めから仕組まれていたことである。A 級戦犯の多くが死刑になり、大々的に名前も公表され、彼らに騙されて戦争の後押しをした一般の日本人も、みな彼らを憎み恨むべきと宣伝されたのである。こうして日本人は自らを戦争犯罪者とおもいこまされ、人間としての生きる立場を奪われたのである。

このような考え方を「自虐史観」と呼ぶ。これは未だにWar Guilt Information Program の影響の下にいる大多数の日本人が、国粋主義者たちの言うこととして、歯牙にもかけない。しかし、そのような日本人の多くが例えば教職員組合に属する教師たちの教育を受け、知らず知らずのうちに左翼系の考え方をするようになってきた。かく言う私も旧職員組合が最も強い北海道で、小中高と教えを受け、隅々まで影響が及んでいる。ちなみに私がフィリピンの山奥の、日本軍が降伏した地域へ宣教師として赴くことを決意した理由も、教職員組合に入っていた教師たちの影響である。日本と日本軍に強い感謝を持っているインドネシアからも、誘いがあったが、私は日本が犯した罪を少しでも償うことが出来ればと思い、フィリピンを選んだのである。私がフィリピンへ行ってすぐに知ったのが、アメリカ人教授に教わった、真珠湾奇襲の真実であり、War Guilt Information Program の影響を受けた教職員組合や、朝日新聞、されに朝日よりも左傾向が強

いとさえ言われた北海道新聞の、間違った情報や教えである。一時は社会党の党首にまで登り、参議院議長をも務めた土井たか子の、極めて左寄りな言行が人気を集めたのも、左寄り国家を作り上げた一つのよう委員であった。ただし彼女の人気は1990年代から急落し、北朝鮮の日本人拉致問題が発覚した時の、彼女の北朝鮮寄りの言行がますます人気の凋落に繋がった。彼女も、広い意味でマッカーサーのWar Guilt Information Program の犠牲者の一人であったのだろう。マッカーサーによって広められたヒューマニズム、民主主義の欺瞞に、元々強いヒューマニズムの感覚を持っていた彼女は、たやすく騙されてしまったのでる。マッカーサー自身は日本での働きを終えて帰国してから、もしも私が日本人だったならば、A級戦犯として裁かれた人たちと同じように、日本のために命を賭けて戦ったであろうと語っている。自分たちの歴史を、宗主国アメリカの都合の良いように書き替えられたフィリピン人の大衆は、私がフィリピンに渡ったときには、すでに、その偽りをかなり見抜き、日本の誠実さに感動し、日本を強く愛していた。それは今も変わらない。私たちが宣教師としてかなり自由に、愛され受け入れられ、何の妨げもなく働きを続けられたのも、そのためであったと考える。日本人は親切である、正直である、自分たちの痛みを理解してくれるというのが、私が訪れた台湾、インドネシア、マレーシア、タイ、ミャンマー、シンガポール、カンボジア、ベトナムの人々の声である。南太平洋の島々にある、小さな国々の人々も同じように言う。日本の左寄りの人の叫ぶ、アジアに侵略した日本という声は、東南アジアの人々の口から聞くことはほとんどない。そのようなことを言い募っているのは、昔の朝鮮、つまり北朝鮮と、韓国、そして日本とはほとんど戦ったこともなく、かえって支援をさえ受けていたこともある、中華人民共和国という、社会主義国だけである。日本が戦った中国は、蒋介石が指導していた中華民国である。社会党は今や消滅し、

日本人の和の精神の破壊

　マッカーサーが行った War Guilt Information program は、非常に徹底しており、効果的でもあった。これは、日本人が戦争犯罪人としての自己権悪に陥り、二度と再びアメリカに向かって牙を剥かないようにするための戦後作戦であった。そのためにこの作戦には、アメリカに都合が悪いと思われることが記されている書物、すなわち日本人の自己受容を促したり、日本人としての誇りや一体感を助長したりする可能性があると思われる、すべての書物を、ことごとく焚書処分にすることも含まれている。そのために、驚くほどの数のありとあらゆる書籍が調べられ、7769冊もの書物好ましくないとして処分されたのである。戦後も80年近くに及んで、アメリカの極秘文書も開示されて10年以上も経過して、これまで国家権力で隠されて来た戦争の史実が、公文書によって明らかにされ出したのである。今後さらにこの膨大な極秘文書が明らかにされ、真実が陽の下にさらされるようになってほしいものである。（注・ 私はこれまで”War guilts information Program を誤って、War crimes Information Program と記してきたことがあります。ここで誤りを認めお詫びを申しあげます。アメリカには近年になって作られた War Crimes Rewards information Program という法律があり、それと混同してしまったのだと思います。 ）このように、戦後日本に駐留したアメリカ軍には、日本人を戦争犯罪者意識、すなわち自虐史観に閉じ込める、非常に強力な作戦があった。そのような史観に閉じ込められる知識階級の人々や組織、特にメディア関係者、教育関係者を、マッカー

サーはあえて黙認し、優遇したことさえああった。彼らの言うことで、一般の日本人の間に自虐史観が広まり、現在に至っても、今私が行っているようなことを言うと、たちまち愛国主義者、国粋主義者というレッテルを張られてしまう。私は愛国主義者ではない。むしろ日本が嫌いな方であろう。ましてや国粋主義者ではあり得ない。客観的事実に基づいて考えようとしているだけである。こうした議論が起こり糾弾されるものが現れたのは、長年継続されて来た日本の和の精神が、酷く傷つけられ、破壊されてしまったのだと感じる。

和の精神の高揚・諸外国に向けての発信

ところが最近、非常に不思議なことが起こっている。日本の和の精神が、再び高く叫ばれるようになってきたのである。これはわたしが言う、神道的感覚のなせる業だと思う。彼らが言う神道的感覚では、八百万の神々を差別せず、排除もせず、仲良く受け入れて来た日本人は、異なった物や意見習慣文化なども排除せず、優しく抱擁して行く性質をもっている。これがこれからの国際化の中で、最も大切なものであるというのである。このような考え方は、伝道は一切しない神道に傾倒しながら、少々不満を持っている人たちが、現在のメディアを利用して語っていることであるとは思う。しかしその背後には、バブル崩壊後に一向に回復しない日本の経済に、いらだちを感じている、少しばかり愛国精神に溢れている人たちの、自虐史観への腹いせの表現だとも感じられる。とは言え、このようなマイナスのイメージの中にも、積極的に考察すべき部分がある。それは、世界に貢献する日本文化の発信である。食の文化、安全と音信の文化、教育と訓練の文化、物づくりの文化などなど、日本には誇るべき文化が沢山ある。しかし、そのようなことであまり誇るのは気が引ける。むしろそのような文化の背後に、War Guilt Information Program の影響も押しのけて、しっかりと根付いている和の文化があることを感じる。それが甚だ手前味噌の八百万の神々への信仰態度から語るのは、笑えて面白いが、あまりにも的外れである。このような言い方は決して新しいものではなく、私が宣教師時代にも、すでにそのような意見を見聞きしたことがある。

　和と言うものは、たしかに異なった人物や意見、考え方、感覚、習慣、文化に対して寛容な心を持つことに始まる。しかし彼らの言うところでは、その寛容の出所に全く根拠がない。神道の精神、その神観を座して学んだことがない人たちの、安易な受け売りだと判断せざるを得ない。神道の精神の最も気高い部分には、目に見えず、手で触れることもできず、口で説明することもできない、気高い存在への強い意識がある。それは一般に神道と呼ばれる、多神教の世界とはまってく異なっている。本来の神道の高貴な神意識は、多神教を排除する。ただ言葉の発達の途上で、どうしても神という言葉を使わずにはおれなかったために、勢い、通俗的な八百万の神々への信仰が、神道であるかのように言われるようになってしまったのである。高貴な神道精神の中の神は、複数の神では無く、日本語の神々の定義に合わない神、神では無い神なのである。だから今でも、日本人の過半数をかなり超える人々が、神は存在しないというのである。しかしその神は、八百万の神々のことであり、彼らが否定しようが否定できない奥深くの強い感覚で、目に見えない神以上の神を感じているために、宗教そのもの、あるいは信仰そのものを否定する日本人は非常に少ない

のである。彼らが否定できないほど強く感じている存在こそ、使徒パウロが聖書の中で語っている、すべての物を超越し、すべての物を貫き、すべての物の中に存在され、さらに、すべての物を内に収めておられる神と酷似しているのである。

本来の神道の、この気高い存在に対する感覚こそ、大切なのである。ところが神道はそのようなことを説明しない。言葉で解きほぐすことが出来ない、すなわち、教えがないことが神道の神道たるところである。そこで私たちが信じる聖書が登場する。私たちが信じる神も、神ならぬ神であることは、聖書を読み進むならばよくわかる。聖書で神を呼ぶ信仰は、神道の高度な感覚を持って神を呼ぶ信仰と、ほとんど同じなのである。共に世俗的な神という言葉の氾濫の中で、一方は神という言葉をそのまま用いながら、全く異なった気高い存在者を本能的に感じ、その気高い存在を礼拝し続けた。もう一方は、多くの外国人の入り混じる環境の中で、著しく変わる神々の名を用いることが出来ず、天地創造という破天荒な話を持ち出して、天地を創造した我こそが、お前たちの礼拝すべき神なのだと教えたことになっている。しかもそれは、人間が教えたのではなく、神ご自身の自己紹介である。

神道の方たちが、そして多くの日本人が心の奥深いところで、気高い存在者を本能的に感じて礼拝して来たというところが大切なのである。どうして、説明できないと初めから諦めるほど高貴な存在者を、感じ敬い感謝し礼拝しながら、本能的に感じる理由を探そうとはしないのか。そこに、神道の良さと限界があるのです。聖書はそこのところをはっきりと教えているのです。つまり、神の姿に似せて造られているからである。神の姿に似せて造られているから、霊的本能を持って神を感じることが出来る。たとえ説明できなくても感じることが出来るのである。幼子が親のことをあれこれと説明できなくても、親の心を感じることが出来るのと同じである。世の中に偶像が溢れているのも、本能的に霊的世界の存在を感じているからである。八百万の神々の世界は聖書の悪魔、天使、悪霊、幽霊などの世界と同じである。そこに多くの神々も含まれているというわけである。

私たちが人種や国籍、あるいは習慣や文化を超えて、仲良く穏やかにお付き合いをしようと望むのも、神が愛のお方であり、交わりを喜び、平和を尊び、助け合うことを善とする性格をお持ちだからである。日本人の美しい性格も、広い心も、神様の善性に似せて造られたからである。本当の所、すべての人類は神によって、神に似せて造られているのであるが、その似せて造られた部分の多くが酷く破壊されてしまっている。もちろんそれは、最初の人間たちの不服従の罪によるのだが、聖書を深く読むと、それだけではないことが明白となる。ローマ人への手紙の第一章を読むと、最初の堕落の後でさえ、人間が創造者を本能的に感じ、礼拝する本能的能力はうしなわれていないと、神ご自身が判断しておられることが分かる。ところが人間はこの神の自然を通しての自己顕現、語りかけを愚かにも無視し、自分たちの知力を誇り、偶像礼拝に埋もれてしまった。そこで創造者である神は、人間をその愚かな欲望のままにお委ねになった。その結果、人間は性に関わる罪をはじめとし、あらゆる罪に溺れることになったのである。それはたちまち社会の廃頽に至り、人間性の腐敗をもたらした。これが私の言う、人間の第二の堕落と刑罰である。

これは一般的に、全人類に言えることである。しかし、少々の例外もありそうである。日本の神道の本来の精神は、見えない神、触れることが出来ない神を崇め、礼拝し、感謝を捧げることである。だから、日本の最高神を祀る神宮では、礼拝はしても、願い事をしてはならないことになっている。他の神社や大社でも、願い事をするのが普通であり、願い事の専門分野まで定められている。巷の神道信仰では、願い事を聞き届けてくれた神には、感謝もするし、捧げものもする。しかし礼拝することは稀である。私たちはたとえ相手が泥棒の人殺しであっても、助けられた場合にはお礼をする。しかし彼を崇拝し、礼拝することはない。それと同じである。ところが私たちが信じる神は天地創造の神であり、礼拝も感謝もする。崇拝して礼拝もするが願い事を捧げて、聞き届けられることを信じて感謝もする。私たちの神は愛の神であり、罪を犯して遠ざけられた人間を、ご自分の方から探し訪ね、声をかけて下さる神なのである。ただ日本人の信仰で優れている点は、偶像礼拝をしないことである。日本人の精神的基盤である神道の気高い神意識、信仰観では、徹底して偶像を忌み嫌い避ける。それでいながら日本人の欠点は、この気高い神意識と、八百万の神々の世界を混同してしまったいることである。私は神道の宮司または神主と言われる人たちと、良く会話を楽しんで来た。彼らに共通することは、偶像礼拝をしないことである。それでいて偶像礼拝をする人々を、優しく受け入れることである。この優しい包容力が日本人の態度である。これは大いに素晴らしいことであると同時に、大変な欠点である。それは創造者である神を怒らせ、人々をより深い罪の沼の中に陥れ、世界のすべての社会に罪の結果の廃頽をもたらすことに繋がる。罪は指摘され、警告されなければならない。

ここで重要なのは、いかにして罪を指摘し、その危険さを警告するかである。ここに私たち天地の創造者である神を信じる者の、賢さが要求される。このところで、西欧渡りのキリスト教は、その無知の故に、日本での宣教に失敗を重ねてきた。彼らはすべての人間が罪人であるという事実を、原罪論というギリシヤ哲学によって発展させられた、聖書のあずかり知らない教えを初めから押し立て、すべての人々を、まず罪人呼ばわりをして怒らせ、聞く耳を持たない人間にしてしまったのである。聖書の教によると、現在の前に、神の御姿に似せて造られた人間が出て来る。人間の本質は罪人ではなく、神に似せて造られた尊い存在である。その尊さをなぜ最初に語らないのか。もしも日本の文化に優れたところがあり、日本人により多くの美しさがあるとしたら、それは日本人が偶像礼拝を避け、貴く気高い存在者だけを礼拝してきたからであると、日本人のすばらしさを引き出し、示し、称賛し、互いに尊敬を持って、楽しく話し合うことが出来るようにしないのか。それは西欧渡りのキリスト教を、そのまま受け入れそのまま語っているからである。西欧のキリスト教は、人間が天地の創造者に似せて造られたという事実を、まったく無視していると言って良いくらい知らないままである。私たち日本のクリスチャンは、日本人の豊かな性質の一つである、守破離を実効しなければならない。すなわち西欧から伝えられたキリスト教の教えを守るところから始めて、そこに間違いや欠点を見出し、それを離れなければならないのである。

心の律法と良心との間に厳しい線を引く

異なった人種や国籍の人々、異なった文化を背景にする人々に対して、私たちは一方的な押し付けを

してはならない。八百万の神々を等しく尊重する文化だから、 日本人はどんなに異なった文化の人とも和を大切にする生き方を進め、進めるというのでは、日本人の独りよがりにすぎず、文化の多様性を過小評価していると言われても反論が出来ない。八百万の神々あのような多神論的感覚は、厳しい唯一信教のキリスト教の中でさえも、形を変えて存在している。天使や悪魔、悪霊、幽霊の世界である。そういう文化の方が普通なのである。だからと言って、その宗教文化の人々が、日本人のように他者に対して寛容になるというわけではない。楽観的であるのは、時には良い結果をもたらすが、常にとは限らない。この文化の問題では、楽観論は絶対に通らない。

多くの異なった文化の中でも、理屈はさて置き、人間の直観的感覚で、何が基本的に良いことなのか、何が基本的に善であるのかという判断はできる。どちらかというと観念論的で、形而上学的な問題である。この範囲にとどまる限り、どこのどの文化を背景にしていても、ほとんど同じ感覚を共有できる。ところがローマ人への手紙第二章を書いたとき、パウロは心に記された律法、すなわち自分自身が律法となっている律法と、良心という問題を併記している。残念なことに当時のパウロも時代の子、環境の子であった。彼はユダヤ教に閉じ込められた福音を、ユダヤ教の枠をぶち壊して解放し、普遍的福音した。彼の生きていた宗教文化の中で考えると、まさに偉大である。普遍的福音の啓示は、普遍的ではあったが時代と環境の中でパウロに与えられ、パウロも時代と環境の中で、自分の育ちとユダヤ文化と言う制限の中でそれを理解し、自分の言葉の制限の中でそれを表現した。それは当然、東の端まで遠く離れた日本の文化や言葉を全く理解していない表現となったのは仕方がないことである。

とは言えさすがにパウロは偉大な頭の持ち主であった。彼はたったの一度だけ、ここで良心を持ち出した。たとえ彼が説明していなくても、私たちは心に記された律法と、良心の関係性を、神学的に考えなければならない。そしてそれを神学的に考えるだけのことは、聖書の中に記されている。心に記された律法とは、人間が神に似せて造られた時に与えられた、神に似た性質である。これは理屈によって説明されるものでも、後天的に学びや訓練で獲得されるものでもない。ただ本能的性質、あるいは本能的能力としてあたえられたものであり、すべての人間に共通なものである。それに比べて良心は、その人の育った環境や教育や訓練、その他のあらゆる文化的要因が影響して、作り上げられて行くものである。言うならば、心に記された律法は、すべての人に共通なもので、植物の種子のようなものである。種子はある特定の環境に置かれて目を出し育つ。環境を失くして育つ種子はない。必ず与えられた環境の中で芽を出し、その環境に応じた育ち方をする。そのために、非常に異なった生育の仕方となる場合が多い。日光の強い場所では、それに適応して育ち、水分の多いところではそれに適応して育つ。環境さえよければ花を咲かせ実をつける。しかし環境が悪ければ、花も実もないままに終わってしまう。これが良心である。

日本人は偶像礼拝をほとんどしない文化の中で育った。それだけ、神の刑罰が軽かったことが考えられる。従って日本の文化は堕落しているとはいえ、美しいもの、良いものが沢山ある。しかし偶像礼拝をしない日本の文化は、世界の中では非常に珍しい。私は自分が宣教師として働いた、フィリピン北部山岳奥地

に住むイゴロット族の中に、日本の神道とよく似た宗教観、神意識を見つけて驚嘆したものである。彼らの神礼拝も、発展してはいないにしても、非常に優れたものである。彼らも偶像礼拝をしないことを特徴としている。だから私は、彼らの中で福音を語るのが容易であった。平地に住むカトリックの信徒に比べると、彼らの倫理観は非常に高く、日本人の和とは少し異なっているとはいえ、和を大切にして地域共同体を形成していた。いったんクリスチャンになると、彼らは非常に高いクリスチャン生活をし始めた。ただ残念なことに、ここにも高度な経済発展の波が押し寄せ、マモンを神とする世界的経済感覚の渦に巻き込まれている人たちが、やたらに目に付くようになっている。

そういうわけで、日本人は日本人の文化の中で良心を形成し、中国人は中国人の文化の中で良心を形成し、韓国人は韓国人の文化の中で、良心を形成する。従って、たとえ神に似せて造られた人間の本性の部分では良く協調できても、良心の部分では、まったく話がかみ合わないことが沢山出て来る。無理に話を纏めようとするといよいよ絡み合って、どうしようもなくなる。戦闘的なモスリム集団の人々と、基本的人権を重んじる人達が話し合っても、まったく埒が開かないことになる。だから私たちは、基本的な人間の本能的感覚を重んじて、まず共通の感覚を頼りに話を始めるべきである。その共通感覚を強く持てるようになり、互いに話が通じ合うようになって、信頼が築き上げられて初めて、具体的な日常の生活に強く関わる、良心の話に入るべきである。

ウェブサイトをはじめとし、世界中の様子が容易く分かるようになった現在、私たちはそれを大いに利用すべきだ。しかし安易なサイトも非常に多い。誤った情報、悪意に元付いた情報も非常に多い。日本の和の精神の輸出も悪いことではない。しかし、送る側も正しい情報に基づき、善意で行わなければならない。幸い多くの文化でも、宗教性の基本は良く似ている、それらを良く学んでから情報の発信をすべきである。日本の和の文化は、八百万の神々に基づいてはいない。日本のクリスチャンは、天地の創造者である神に似せて造られた本源的人間性の心の律法と、それを文化的に適応させた良心の違いをしっかり理解して大いに語るべきである。それがこの末の世に、私たち日本人クリスチャンとしてできる、最大最善のことである。